

約1200年前の海岸線より加古川に思いを馳せると何が見える？

書籍「東播磨の歴史（1古代、2中世、3近代）」（東播磨の歴史を考える実行委員会）を興味深く読んでいる。

加古川という川は暴れ川で、その下流域では流れが定まらず、古代においては交通に不便であったと記されている。われわれはつつい、山陽道(西国街道)に目が行きがちであるが、古代においては流れが定まらぬ加古川を越えて移動するには困難が伴ったようだ。兵庫県山間部を東西に通る道が早く開けたようだ。また、瀬戸内海から日本海に抜けるのにも、加古川から分水嶺を経て由良川に抜けるのではなく、明石川から志染川へと移動し、それを下って美嚢川に至り、美嚢川より加古川に入ってそれを北上したのではないかとの記載もある。加古川と美嚢川の合流点はちょうど加古川の中流と下流の境あたりに当たる。

第2巻の中世に右の図が記されている。1200年前には、高砂あたりはまだ島(砂州)であったようだ。ここに加古川上流から運ばれてきた砂や土砂が堆積し、現在の海岸線(点線で示されている)が形成された。

この図からすると、阿閉津(あへのつ)は早くからあったようだ。

書籍「東播磨の歴史 2 中世」 p 222 加古川の舟運の始まり より

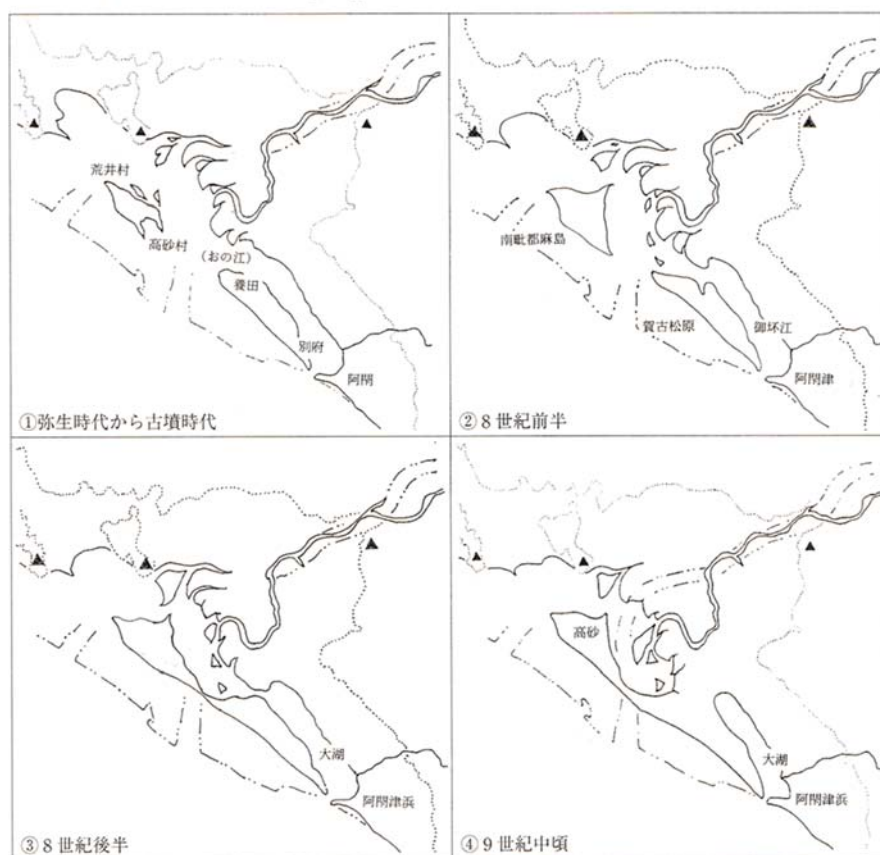
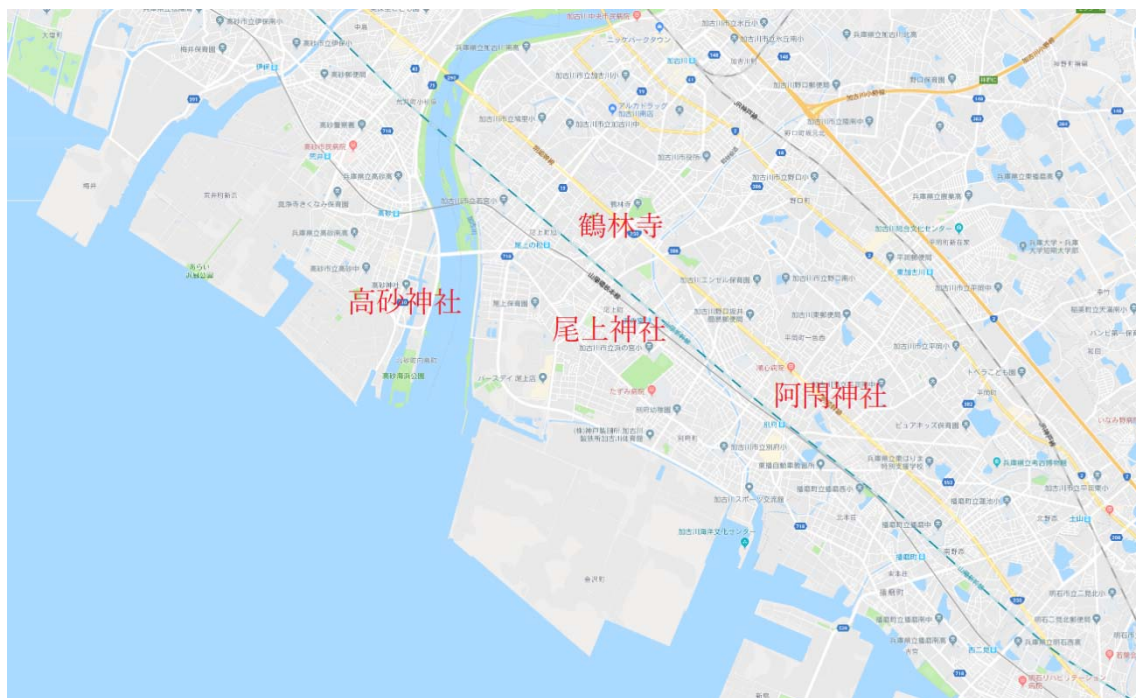


図2 加古川河口の変遷(推定)

また、鶴林寺（589年創建）がある位置は古代の海岸線に近かったようだ。しかし、尾上神社や高砂神社となると、その位置は古代には砂州であったり、海であったりした可能性が強く、果たして古代からこの2つの神社が存在していたのか、いささか疑問となる。



それらの神社は、ブログ「古代史探訪」によると、阿閩神社よりもその創設が古い時代となる。ただし、神功皇后ともなると神世に近い世界であり、権威を持たせるために神社自身がそう言っているという世界である。

#### 阿閩神社（あえじんじゃ）

国重要文化財の住吉大社神代記（天平3年、731年）に阿閩社として記されている。当地は播磨国風土記に「阿閩の津」と記され、昔から瀬戸内海交通の盛んな港であった。当社は海上守護神としての住吉大社から「子神」として御分霊を奉斎した。

当地の阿閩荘は中世には住吉大社の荘園で、近辺には住吉神社が非常に多い。

#### 高砂神社

神功皇后が外征（神功皇后の新羅出兵は西暦363年？）のとき、大己貴命の神助を得て敵を平らげられた。帰国の途中、この地に船を寄せられ、国家鎮護のため、大己貴命を祀られたのが高砂神社の始まりです。

その後、天禄年間（970年～972年）国内に疫病が流行し、庶民が苦しんでいた時、神託

によって素盞鳴命と奇稲田姫命を合わせ祀ったところ、疫病がたちまち治まったので、庶民は喜んでお礼参りをした。「高砂牛頭天王、祇園社、ぎおんさん」と呼ばれるようになった。

#### 尾上神社

神社の由緒によると、神功皇后が三韓征伐の時（神功皇后の新羅出兵は西暦363年？）、航海の無事を住吉大明神に感謝したことから建てられたという。国の重要文化財である「尾上の鐘」と、古くから歌に詠まれている「尾上の松」で有名になり、江戸時代には「播磨鑑（はりまかがみ）」や「播州名所巡覧図絵」にも紹介され、多くの人が訪れる観光スポットになっていた。

阿閑の里に関連しては面白い記載があった。第3巻の「加古川舟運の隆盛」において、加古川の川筋を、滝野から高砂まで高瀬舟が通れるように浚渫した阿閑与助は、阿閑（あえ）と関係がある人物と、紹介されている（p156）。阿閑の閑を江に変えて姓にしたと。

阿江与助 あえ-よすけ コトバンクより

?-1634/71 織豊-江戸時代前期の水路開削者。

文禄(ぶんろく)3年播磨(はりま)(兵庫県)姫路城主木下家定の命をうけ、滝野から下流の加古川を、また慶長9年には姫路藩主池田輝政の命で上流を改修し、加古川流域の舟運の開発につくした。寛永11/寛文11年1月17日死去。本姓は大久保。名は正友。